

第6章 被災地ボランティア・レポート



建物の上に乗ったままの船（岩手県大槌町にて）

震災から3カ月が経過した被災地—岩手県沿岸地域の現地視察レポート

NPO 法人「鎌倉てらこや」事務局長
早稲田大学大学院社会科学部博士課程
小木曾 駿

はじめに

2011年3月11日午後2時46分、宮城県沖を震源として東日本大震災が発生した。最大震度7を記録した揺れの激しさもさることながら、周知の通り、幾重にも張り巡らされた

防波堤を遥かに乗り越える想定外の巨大津波によって甚大な被害がもたらされた。その被害を受けた地域は、青森県から千葉県にいたるまで、広範囲に渡った。

あの未曾有の震災が起こった3.11から、ほぼ100日が経過した7月4日。震災直後から被災地の支援活動を継続的に行ってきた「NPO 法人 全国てらこやネットワーク（以下「てらネット」）」の活動の一環として、私は津波によって甚大な被害を受けた岩手県沿岸一帯を視察させていただく機会を得た。私は子どもたちの日常支援に関わる震災復興事

業に関わっており、原発から避難している子どもたちへと会うために、福島県会津若松市に数回の訪問を重ねている。しかし、直接津波被害を受けた沿岸部を訪れるのは震災以後初めてであった。

メンバーは、「てらネット」の大西克幸理事長、建長寺の宗務総長を務められ、「NPO 法人 鎌倉てらこや」の活動でも大変お世話になっている高井正俊先生、そして私の3人である。企業人、僧侶、大学院生という異色ともいえる3人の取り合わせで、釜石市、大槌町、山田町、大船渡市、陸前高田市を1日で周る、走行距離 200km を優に超える現地視察となった。以下、各々の地域における、震災3ヵ月後の被災地の様子を、順を追って報告させていただくこととする。

岩手県北上市に入る

私たちは、前日のうちに東北新幹線で岩手県北上市に入り、翌日早朝から一日をかけて、岩手県の沿岸部の震災3ヵ月後被災地を周らせていただく予定となっていた。7月3日の夕刻、東京駅を出発し、新幹線に揺られること3時間、無事岩手県の北上駅に到着した。北上では、「てらネット」の震災復興事業における現地でのパイプ役としてお世話になっている北上青年会議所の伊藤隆一さんにお出迎えいただいた。

北上市は、岩手県の内陸部に位置し地盤も堅固なため、今回の震災における建物の被害はほとんどなく、ライフラインの復旧も比較的早かったという。しかし、伊藤さんのお話

によれば、沿岸部に住む親戚が被害を受けているお知り合い多く、また、直接の被害は受けなかった方々も様々な形でご自身の仕事に大きな影響を受けているとのことである。また、北上市における震災復興プロジェクトのキーパーソンで、明日、私たちを被災地へと案内してくださる、同青年会議所メンバーの菊池隼さんについてのお話も伺うことができた。

北上から被災地に向け出発

北上市のビジネスホテルに一泊した私たちは、明朝早くに北上を出発した。そして今日一日私たちを被災地へと車で案内して下さるのが、昨日の伊藤さんとの会食のなかでも話題に登った北上青年会議所の菊池隼さんである。まるで、少年のような無邪気さを感じさせる笑顔で、菊池さんは私たちを出迎えてくださった。

北上に住む菊池さんは、幸いなことに、震災の被害を受けなかった。しかし、震災直後から断片的に伝わってくる岩手県沿岸地域の情報を聞くにおよんで、「いてもたってもいられなくなった」という。そして、「できる人がやれることをやる」というスタンスで、北上からおおよそ60キロ離れた釜石での活動を、震災直後からほぼ毎日続けている。そして釜石市に通い、救援物資を届けたり、自衛隊と一緒に行方不明者の捜索をしたりしているうちに、自然と仲間が広がっていったという。

現在は、「被災地の願いとボランティアの想いをつなぐこと」を目指し、全国から集まるボランティアをコーディネートして、釜石の

瓦礫撤去ボランティアを行っているという。震災以降は、一週間のうち6日間は釜石へと通う生活となっており、残りの1日でご自身の仕事をこなしているという。それでも「周りのみなさんのサポートのおかげで、なんとか1日仕事をさせてもらえるようになった。それがとてもありがたい」と仰っていたのがとても印象的であった。

北上から釜石までの道のりは、柳田国男の『遠野物語』で有名な、遠野の自然の中を駆け抜けていくことになる。北上を出発すると、被災地に向かう車と朝の通勤ラッシュとが相まって、数か所で渋滞が発生していた。北上市から、ボランティアの現場となる釜石市まで向かうだけでも一苦労である。結局1時間半をかけて、車は釜石市に到着した。

釜石市内に入っても、しばらくは地震の影響をほとんど感じさせない。その街並みが一変するのが、JR釜石駅を過ぎたあたりからである。ある地点を過ぎると、道端のフェンスがなぎ倒され、歪んでいるのが目に入ってくる。そしてふと前方に目をやると、1階部分が破壊され、支柱が剥き出しになった建物が立ち並ぶようになっていく。



写真① 日常の風景が一変するのは、JR釜石駅の周辺を過ぎたあたりから

釜石市のボランティアセンターへ

釜石では、個人ボランティアと支援が必要な現場とをコーディネートするボランティアセンターが、震災直後のかなり早い段階から立ち上がり、全国からボランティアを受け入れているという。既にセンターの常連となっている菊池さんは、ボランティアセンターからの人望も篤く、現場におけるボランティア人数の調整役を任されることもあり、ボランティアから「センターのスタッフと間違えられることもしばしば」だと言う。

釜石市はリアス式海岸が広がる岩手県沿岸部の中部に位置し、福島県や宮城県と比べると関東から遠く、東北新幹線が通る北上からの交通の便も良いとは言えない。また、海沿いに広がる中心街は甚大な被害を受けたが、海と反対側の丘陵地帯に建てられていた建造物は被害を免れ、震災以前とほぼ変わらずにその姿を留めている。そのため、町全体としてはそれほど被害が大きくないように見えることもあり、必要とされる作業量は膨大であるにも関わらず、ボランティアが集まりにくいのが現状だという。

それでも、200～300人がボランティアセンターに集まり、釜石でのボランティアに参加していたが、ゴールデンウィーク終了後にはボランティアが激減したという。私がボランティアセンターを訪れた際にも、首都圏からのボランティアバスが駆けつけるなど多くのボランティアで賑わっているように見えた。しかし、最近の週末では、訪れる人々の数が50～60人に留まっており、平日に活動できる

ボランティアはさらに少なくなっているとのことである。



写真② 釜石市の仮設ボランティアセンターの様子

釜石のボランティアセンターで少しお話を伺った後、車は津波の被害を受けた釜石市の市街地へと進んでいった。震災以前はメインストリートであったであろう商店街を見ると、店舗のあった一階部分はほぼ壊滅状態である。やはり大変な状況になっているのだと思って見ていたが、「いやあ、大分片付いてきたなあ」と菊池さんが嬉しそうに仰っていたのが印象深い。震災直後、津波が引いた後の商店街の両脇には瓦礫があふれ、車一台通行するのが精々といった有様だったという。

そのころからすれば、現在は車の対面通行も可能となっており、道路から瓦礫もほぼ片付けられている。また、ローソンの新店舗が改装オープンしているなど、わずかながら、復興への足音を感じることができた。しかし、メインストリートから一本脇道に入ると、そこには、かつて住居であった瓦礫の山が高く積み続けている光景が広がる。市街地区の瓦礫撤去を行うだけでも、まだまだ時間がかかることが予想される。

ところで、瓦礫撤去を行うボランティアと、地元の民間清掃業者の間でちょっとした争いがおこることがあるというお話を菊池さんから伺うことができた。休日を利用して他地域から実家に戻り家の片づけを行う人々は、現地に来られるのは土日しかないという。しかし、民間業者は土日が休日とする場合が多い。民間業者では対応が難しい役割を、菊池さんのような瓦礫撤去ボランティアが担っている。

しかし、震災によって仕事が激減している地元の業者の立場からすれば、自分たちの仕事が少なくなるのは死活問題であるとも言える。そのため、菊池さんのようにボランティアセンターと協働しながら瓦礫撤去の現場に赴くボランティアに対して、“自分たちの仕事を取られた”という感覚を持つ民間業者の人々もいるという。

ボランティアと民間企業間の競争は、2000年の介護保険制度導入を契機として、福祉ボランティアの現場でも発生している課題である。「瓦礫撤去」という一つの要素を取り上げても、今後の日本社会において、ボランティアがプレゼンスを高めていく中で多く発生していくであろう、現場で起こる課題を垣間見ることができた。



写真③ 被害を受けた釜石市内の商店街

東日本大震災と、16年前に発生した阪神大震災を比較すると、いくつかの違いを挙げる事ができる。阪神大震災は直下型地震であったこともあり、その被害の多くが建物の損壊であった。高速道路が横倒しになっている映像は、今見ても直下型地震の恐ろしさをありありと思ひ起こさせる。阪神大震災における課題は建物の強度であり、建物が損壊したのと同じ場所に耐震強化した建物を建てることで、復興を進めることができた。

しかし、東日本大震災の被害の多くは津波被害であり、考えたくないことだが、再度地震が起こり津波に襲われる可能性を考慮するならば、津波被害を被ったその場所に震災前と同じように町を再建していくことは、防災的にも、心情的にも難しいと言わざるをえない。そのため、復興のためには町のあり方そのものを根本から変えていかなければならない。

菊池さんは、このことについて人々が自分の町作りのことを考えていくきっかけになりうると見ている。元々漁師町であった釜石市は、明治初めに官営の製鉄所が作られたこと

もあり、近年にいたるまで新日鉄による典型的な企業城下町として栄えてきた。しかし炭鉱が閉鎖されて以降、町の活気は失われていったという。全ての若者を地元で雇用するには限界があり、多くの者は都市部へと出稼ぎにいかざるを得なくなっていった。そうした状況において、町を出て都市に住む子どもたちの仕送りによって、高齢化が進む両親の世代を支えていかざるを得ない社会構造ができあがっていたという。そうした高齢化・過疎化という事態が回避に進行していた町を、今回の震災は襲ったのである。

目下のところ喫緊の課題である瓦礫撤去作業と並行して、津波被害地域で生活していた人々が、新たに生活を営んでく場をどのように創出していくのかを考えていくとともに、若者が自ら生まれ育った故郷でやりがいある仕事を得ることにより、家族と共に生活を営んでいけるよう、将来性のある未来に向けた町づくりの“グランドデザイン”を、町の人々自身が手を取り合って作り上げていくことこそが重要であると、菊池さんは指摘している。



写真④ 津波が押し寄せたことを証明するように、いまだ港には巨大な船が座礁している

壊滅状態の大槌町と人影の跡絶えた山田町

釜石を出発した私たちは、釜石市の隣に位置する大槌町へと北上していく。大槌町の被害はまさに文字通り、「一つの町そのものが津波によって流されてしまった」という甚大なものであった。震災以前にどのような町並みであったのか想像がつかないほど、見渡す限り何もない荒地という有様である。しかし、大槌町のあまりの被害の大きさは、マスコミによって連日報道されることとなった。

メディアによって多く報道された地域には多くのボランティアが集中する。そのため、大槌町には特に多くのボランティアが集まり、瓦礫撤去に関しては釜石市よりも大槌町の方が進みつつあるという。ボランティアが多く集まり、復旧が進んでいることはとても素晴らしいことではあるが、一方で報道の多寡により、地域によって参加ボランティアの人数に大きな偏りが生まれ、同じ岩手県近隣地域間においても、復興に向けて格差が生まれつつあるという今後の課題も浮上しているという。

さらに私たちの車は、整備されていた道路が流されてしまったため、急きょ海端につくられた車一台がやっと通れるほどの仮道路を抜け、山田町の、山と山の間に存在する海沿いの小さな集落へと到着した。

密集した地域が大きな被害を受けた阪神大震災とは違い、津波によって広範囲に被害が及んだのが、今回の東日本大震災の特徴の一つである。また、同じ地域でも場所によって津波被害には大きな差があり、海に面してい

る方向や川の有無などにより、壊滅的な被害を受けた地域と、ほぼ全く被害を受けていない地域とが混在している。そのため被災地全体を見て効率的に順序立てながら支援を行っていくというよりも、できるところから次々と対応していかざるをえないのが現状のようだ。

中でも孤立した小さい集落の中には、震災直後から支援物資が滞りがちであっただけでなく、震災から3ヵ月が経過した現在でも、復旧に向けた作業にまったく手がつけられていない「意識的に見落とされている地域」が少なくないという。

山田町の沿岸地域は、まさにその「意識的に見落とされている地域」の一つであり、瓦礫撤去などの復旧に向けた作業はほとんど行われていない。震災直後に人命救助・不明者捜索が行われた後、町はほぼそのまま取り残されているとのことである。菊池さんたちのグループが飾ったという数十本の鯉のぼりだけが、人気が全くない瓦礫の山と化した町の空に泳いでいた。



写真⑤ せめても菊池さんたちが飾った鯉のぼりが、今は全く人影の見えない町の空に泳いでいた

このように、一口に津波の被害を受けた沿

岸地域といっても、町の地形や規模、震災後のメディア・報道の量に比例するボランティアの参加の多寡などのさまざまな状況により、復旧・復興に向けての現状は大きく異なっている。その結果として、それぞれの地域で求められている支援のニーズも多様なものとなっており、地域ごとに細やかな支援が必要とされている。

このような現状を見るにつけ、機敏さや柔軟さを身上とするボランティアだからこそ果たしうる役割は膨大であり、ボランティアの長期的・継続的な支援も、今後ますます必要とされるであろうことを実感した。

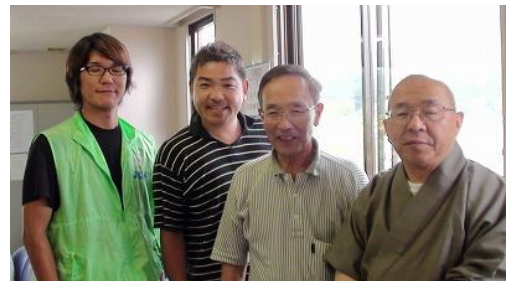
大船渡市の被害状況を聞く

山田町の視察を終えた私たち一行は、ボランティアで賑わう道の駅で昼食をとった後、沿岸道路を南下した。大船渡市への道すがら、津波の被害を感じさせる地域時折見られるのだが、中には、海からかなり距離のある山間部にも津波の痕跡が残されており、驚かされることもあった。

大船渡市も津波によって、市内の主要施設がほぼ津波の被害を受けるという甚大な被害を受けた地域である。大船渡では、7月16日に神奈川県鎌倉市の大船で行われた岩手県復興支援イベント「大船と大船渡祭」にご協力いただいた大船渡市観光物産協会事務局長の新沼信男さんを訪ねた。



写真⑥ 震災3カ月後の大船渡市の惨状



写真⑦ 大船渡市観光協会の新沼さんと（中央右）

大船渡市の中心街にあった大船渡市観光物産協会の建物も、残念ながら津波によって全て流され、現在は津波の被害を免れた建物の2階を間借りしているという。新沼さんは、震災のまさにその最中、目前に迫りくる津波を前に、最低限仕事のために必要なパソコンを運びだすのが精一杯で、これまでの観光協会の長い歴史が記されていた紙媒体の資料を運び出せなかったことが、今でも大変心残りだと残念がっておられた。

今回の視察において、震災当日の様子について何人もの方々からお話を伺うことができた。実際にお話を伺うまで、「あの日」のことは思い出すのも恐ろしいことなのではないかと想像していた。しかし実際には、こちらから伺わずとも皆さん雄弁に、そしてやや興奮

した面持ちで、震災の日のことについて語ってくださったのが印象的であった。

もしかすると被災地では、震災について改めて語ることでできる機会に飢えている方が多いのかもしれない。もちろん震災から3ヶ月が経過し、被災地も落ち着きを取り戻しつつあるが、精神的な余裕を感じることは少なく、将来の見通しを立てることのできない切迫した緊張状態が続いているという実感を受けた。現地で実際に震災を共有していない「よそ者」の私たちであったからこそ、忌憚なく、地震の恐ろしさをお話し頂けたのかもしれない。

こうして被災地である現場へと足を運び、「あの日、あの時、何が起こっていたのか」を語り直していただくことでその「想い」を共有していくことは、現地の方々にとって、そして私たち自身にとっても大切ではないだろうか。

不慣れな環境の中、必要最小限の設備しか使用できない中、大船渡の、そして東北の復興に向けて、一早く動き出されている新沼さんからは、苦難の真ただ中であっても前を向いて歩いていく、人間の底力を感じさせていただいた。

陸前高田市の慈恩寺を訊ねる

その後、車はさらに南下し陸前高田市へと向かう。今回の視察の目的の一つである、高井和尚のご友人の、慈恩寺というお寺の古山敬光ご住職を慰問するためである。

陸前高田市の被害も甚大なものである。川

を駆け上った津波は、普段は海さえ見えない内陸部までもを襲った。名勝として名高かった千本松原も、奇跡的に残ったわずか一本を除き、全て流されてしまったという。

そうした津波の影響を感じさせる地帯にある山の中腹に慈恩寺はある。柔和な笑顔が印象的な和尚様は、昔からの知己である高井先生をはじめとする私たちの訪問を歓迎してくださった。

また震災直後の写真を交えて、今日までの慈恩寺での生活の様子もお話しいただいた。高台にあることもあり、震災直後から山のふもとの多くの人々が避難されてきたという。

しかし、お寺にもまたたく間に津波は押し寄せ、玄関と目の鼻の先にある山門は、津波によって次々と流されてくる家屋によってふさがれた。そしてお堂まであとわずか10センチという高さまで水が押し寄せ、和尚様も浸水を覚悟したという。幸いなことに、その後水は徐々に引いていき、なんとかお堂への床上浸水は免れたとのことである。



写真⑧ 写真を交え当日の状況を聞く

震災前は家々が立ち並び、お寺の駐車場から海が見えることはなかったという。しかし現在では、はっきりと大海原が眼前に広がっ

ているのが確認できてしまうほど、町の風景は一変してしまったという。

ところが、本当に大変だったのは震災後であったと古山和尚は仰っていた。まず、震災後3日間は電話等の通信機器が繋がらず、道路も破壊されてしまったために地域全体が孤立し、外部とまったく連絡を取ることができなくなった。お寺に避難していた100名を超える住民の皆さんと眠れぬ不安の日々を過ごしておられたという。震災から4日後に、ようやく空から自衛隊によって発見され、支援物資を届けてもらったとのことである。

その後もお寺は、避難者の方々が自分たちの生活手段を確保できるまでの避難所として開放されていた。そして、私たちが慈恩寺を訪れたちょうどその時、お寺に留まっていた最後の数人の方々が、お寺を後にする瞬間に立ち会うことができた。お別れの際には、苦難の日々を共に過ごした和尚様をはじめとするお寺の皆さんとの絆を、抱き合いながら確かめ合っていたらよかったのが印象深い。

慈恩寺に避難していた方々のご家族・親戚にも亡くなったかたが多数おられ、中には未だに親御さんが見つからないお子さんもいると言う。現在まで、東日本大震災によって亡くなった方々は15,000人を超え、行方不明となっている方々も4,000人以上を数えている。3カ月が経過し、日々報道され続けてきた死者・行方不明者合わせておよそ20,000人。そのあまりに大きな数字に慣れてしまっていた私にとって、慈恩寺の和尚様とお寺の方々との出会いは、それぞれの方々にそれぞれ

の生活があり、それぞれの家族があったこと。そして、身近な人を亡くし、遺された人々にとっては「まだ3ヶ月しか経っていないのだ」ということを思い出させて下さった。



写真⑨ この石畳まで津波は襲ってきたという

北上から再び東京へ

慈恩寺を後にして陸前高田を出発した私たちは、帰りの新幹線の時間を気にかけてながら北上への帰路についた。往路と同じように、岩手の緑豊かな山の中を越えて行くのだが、行けども行けども同じような風景が広がり、北上にまで戻るのも、やはりひと苦勞である。

北上に到着すると、帰りの新幹線の時間まで少し余裕があったので、枕流亭というお店にお邪魔した。枕流亭では、菊池さんが中心となって開発された北上自慢のB級グルメである北上コロッケをはじめとする北上自慢のお料理の数々をいただいて、一同大満足であった。その後北上駅から東京行の新幹線に乗り込み、今回の現地視察からの帰途についてのである。



写真⑩ 菊池さん、本当にどうもありがとうございました

今、私たちができることとは

被災地域の範囲が広い今回の震災では、まだ復旧に向けての足がかりすらつかめていない地域も多く点在して残されており、まだまだ一人ひとりのボランティアの力が求められている。

逆に全国には自分の力を活かし東北の復興に役立ちたいとは思っていても、「どのようなことができるのか」「本当に自分が被災地に行って役に立つことができるのか」「ボランティアをするためには誰に話を聞いてみればいいのか」などの情報をもっていないために、ボランティアを行うことに対して、二の足を踏んでいる人も少なくないのではないだろうか。

これまで菊池さんのもとには、約400名のメンバーがボランティアとして登録し、のべ1,200人がボランティアとして参加しているという。このように、“被災地の願い”とボランティアの“個人の想い”をつなぎ、実際に活動をコーディネートしていく菊池さんのような存在こそ、今後の被災地への中・長期的なボランティアの参加を継続していくためには大事になるに違いない。

また菊池さんが何より強調していたのは、一番大変な時期にボランティアとしてきてくれた人々とのつながりを、瓦礫がなくなったからといって“終わり”にしてはいけないのではないかということである。「今回の震災を機に生まれたつながりを今後も紡ぎ続けていくことが、東北の復興だけでなく、ともに日本の未来を創っていくにあたって一番大切だと思っている」と語っていらっしゃった姿がとても印象深く心に残っている。具体的な今後の展望として、菊池さんはこれまで行ってきたコーディネート機能を仕組化するためにNPOを立ち上げることも視野に入れて活動を続けていきたいと語った。

しかし、菊池さんのような、自らの仕事よりも被災地の復興支援活動を優先させる被災地への関わり方を、全ての人が行うことはできないだろう。とはいえ、私たちができることは決して少なくない。時間と体力が許すのであれば、現地へ赴き、瓦礫撤去のような活動を実際に行っていくことは被災地にとって求められていることであろう。被災地に行くことはできなくとも、お金を寄附するという形で自らの想いを託すこともできる。

現在はまだ被災地のあちらこちらにたくさん瓦礫が転がり、多くの被災地にとって支援が必要なことは明らかである。しかし、今後瓦礫撤去が進み、表向きには支援の必要性が見えなくなってからも、新たな町づくりのグランドライン策定が不可欠である。

例えば、実際に生活を営んでいくための産業復興支援や就労支援、さらに町の未来を築

いていく子どもたちを対象とした教育支援などがあげられよう。これらは直接的な成果の見えにくい地道な支援活動であるが、長期的・継続的に行なっていくことが、東北の本当の復興のために必要となってくるに違いない。

そこで菊池さんが危惧していたのが、“東日本大震災”という出来事が、被災地以外の人々にとってすでに風化し始めているのではないかということである。少なくとも東京において(あるいは被災地以外の人々にとって)は、表向き、日常の生活が戻ってきているように思われる。菊池さんは、震災に対する人々の記憶の風化が始まるまでの時間が、「阪神大震災では1年、新潟中越沖地震では半年といったところだったのが、今回の東日本大震災では既に3カ月で風化が始まっている感覚だ」と仰っていた。

マスメディアは震災をどう報道したか

もちろん被災地以外の人々にとっても、東日本大震災の記憶は一生忘れることはないだろう。3月11日。震度にして5強という激しい揺れは、首都圏の都市機能をマヒさせるのに十分であった。電車をはじめとする公共交通機関は全面的にストップし、東京都内の勤務先から、郊外の自宅へと帰ることができなくなった多くの帰宅難民が発生した。地震直後から携帯電話はほぼ不通となり、幅広い地域で停電が引き起こされた。電気の復旧後、テレビから映し出された映像は、家が燃え、町が津波に飲み込まれていくというまるで映

画の世界のようなものであり、私はテレビの前でただただ愕然とすることしかできなかった。さらに、福島第一原子力発電所が水素爆発を起こし、日本における全ての原発の運転が停止した影響もあり、首都圏では計画停電も行われた。

しかし、これまでのところ4月以降計画停電が行われることはなく、震災の影響を日々の生活の中で感じさせられるのは、節電啓発ポスターなど、生活の「不便さ」を感じる際に限られているのではないだろうか。被災地の、この世のものとは思えない非日常の日々を映し出していたテレビは、気がつけば震災以前の、繰り返される政治ショー報道とバラエティ番組で溢れている。

えてして、あまり変り映えしない、かつて人々が住んでいた家、あるいは人々が乗っていた車だった膨大な量の瓦礫を一つひとつよりわけていくような地道な活動を続けている人々の様子は、マスメディアでは報道されにくい。「震災以後初めて下水道が通った」、「道が開通した」というようなニュースが多く発信されていくことは、劇的な変化、インパクトを求め続けるマスメディアにとって、仕方のないことかもしれない。あれだけ多かった被災地の情報は、一瞬の出来事に過ぎない「復興」に向けた明るい情報か、被災地以外の地域に住む私たちの日常生活にとって「不便さ」を強要するニュースに限られているように思われる。

一方マスメディアとは、大衆が求めるものをニュースに仕立て上げていく存在であると

すれば、そうした劇的な変化を伝えるニュースを求めているのは、むしろ私たち自身であるということもできるかもしれない。やや意地悪な言い方をすれば、マスメディアをはじめ、私たち自身も含めた社会全体が、まるで偽りの「日常」を演じているように感じることにすらある。むしろ、被災地以外に住む私たち自身がマスメディアと結託しながら、被災地の将来の見えない大変な現状から目を背け、震災直後の生々しい感覚に瘡蓋をかぶせるために、無理矢理「日常」を演じている部分も大きいのではないだろうか。停電の時間を逆算し、洗濯をしたり料理をしたりする。そんな非日常の生活の日々から、もう既に、3 カ月という時間が経過したのだ。

震災を風化させないために

しかし、被災地以外の人々が持つ「もう3カ月が経過した」という感覚と、慈恩寺で和尚さんに思い出させていただいた、大切な人を亡くした遺族にとっての「まだ3カ月しか経っていない」という、東日本大震災に対する“時間のとらえ方のズレ”を、今回の視察を通して最も強く感じさせられた。

被災地では多くのボランティアの活躍にも関わらず、まだ復旧にすら至っていない地域が多いと言わざるをえない。しかしそうした被災地の現在の声が、震災に対する“時間のとらえ方のズレ”によって、被災地以外に住む人々の元へ届きにくくなっている現状があるのではないかと菊池さんは危惧している。

その結果として首都圏では、震災直後に充

満していた生々しさを含んだ感覚はすでに消え去り、各人による自らの生活の営みを繰り返す日常の日々に戻りつつあるといえる。しかも被災地の現在を伝えるニュースが激減しているため、震災直後と比較して、震災からおおよそ100日が経過した現在の方が、被災地の現実を受け止める機会は限られているようにすら感じる。

東日本大震災は過ぎ去った過去のひとつの出来事として、人々の興味の関心の中心から一定の距離が置かれ、被災地の心に寄り添う意識を薄れつつさせているのが現状であろう。はたして、一体どれだけの人々が被災地の現状を、震災直後のように生々しく、震災を「自分のこととして」とらえ続けられているのだろうか。

被災地から離れた地域に住む私たちにとっても震災を風化させずに「自分のこととして」—あるいは「自分自身も関係のあることとして」—とらえ続けていくためには、被災地の現状を知ることが何より大切であろう。そのためには、ボランティアであれ観光であれ、直接被災地へと足を運ぶことを、今だからこそお勧めしたい。そして被災地である現地の現状を知り、その生の声を、ご家族・ご友人へと発信してほしいと菊池さんは仰っている。

これまで繰り返し述べてきたように、今回の震災では被災地域がとても幅広いのが特徴である。その中で求められていくであろう支援のあり方とは、必然的に、中・長期的かつ継続的なものとなっていかなざるをえないだろう。そこで中・長期的かつ継続的な支援を行

っていくにあたって何よりも肝要なのは、被災地の痛みを、一人ひとりの自分の痛みとして分かち合うこと。そして、被災地の“願い”とボランティアの“想い”をより合わせながら、長い長い復興への道のりをともに歩んでいくと決意し、ひとつひとつ実行に移していくことに他ならないのである。

最後に—今後の課題

テレビで繰り返し見ていたはずの被災地にポーンと投げ込まれたとき、私は大変なショックを受けた。テレビの画面を通して見てきた映画のような街並みと、私が普段何気なく生活している日常とが地続きで繋がっていること、そしてその落差を改めて実感してしまったときに、恥ずかしながら衝撃を受けてしまった。そして、私が岩手県の各沿岸部で感じたこと、菊池さんや多くのみなさんから伺ったお話を、どのような視点からどのようにまとめ、どのようにご報告するのがよいかを思い悩んでいるうちに、思った以上の時間が経過してしまっていた。

今回の視察の最後に、一緒に同行していただいた高井和尚がつぶやかれた「復興支援と
うか、お互い様なんだよな」という言葉が胸に残っている。今回の東日本大震災にあたっては、たまたま私たちは支援をさせていただき立場ではあるが、だからといって一方的に支援をさせていただいているわけではない。逆に、支援を通して多くのことを受け取ることができた。

実際のところ、上記の報告で私が感じた感

情や想い、被災地の空気感、お話を伺わせて頂いた方々の祈りや願いの全て書き記し、表現できているとは到底思っていない。これだけの長文となってしまっていることも、私自身の中で今回の大震災をどのようにとらえるかという課題がまだまだ消化しきれていないことの証左であると言える。

しかし、私自身がどのように震災をとらえるかという課題と、実際に被災地に求められている支援活動を行っていくことに関しては全く話が異なる。自分自身ができることを行っていくことによって、助けを必要とされている方々の支援をさせていただくことは大切なことであるとともに、むしろ当たり前のことであろう。

そうした日々の復興支援活動を重ねていながら、私自身が震災をどのような視点から、どのようにとらえていくか。つまり、東日本大震災とその後の復興への道のりに対して、私自身がどのように向き合い、共に歩んでいくべきなのかという課題に対して、実際に震災復興支援に関わりながら考え続けていきたい。

今回は視察の時間しか取ることができず、実際に瓦礫撤去等の作業につくことはできなかった。また近いうちに、実際にボランティアをさせていただくために、岩手に、東北に戻りたいと思っている。